

医心 伝心

水虫は今や国民病

県医監事 佐藤 英敏

毎年梅雨が近づくと、皮膚科を訪れる水虫患者さんが増えてまいります。とは言っても、最近是一年中外水虫患者さんが来院されるので、水虫に関しては季節感あまり感じられなくなりました。水虫は白癬菌といわれるカビの一種が皮膚の角質に寄生して生ずる皮膚病です。高温・多湿を好む白癬菌にとって、靴を履く習慣が定着した日本人の生活環境が足に好発する原因です。足以外でも手水虫、爪水虫、たむし、いんきんたむし、しらくもなど体のどの部分にも発症しますが、これらも足水虫から伝染するケースが大半です。日本人の推計水虫患者は2,500~3,000万人と云われ、4~5人に1人は水虫に罹患している計算になります。また8人に1人は爪水虫とのデータもあります。今や日本は世界の水虫大国の一つで、花粉症と同様「国民病」といっても過言ではなくなってきました。

ひと昔前までは水虫は「中年男性=親父の病気」と思われていました。実際40代以降の中老年男性の罹患率が最も高いのは事実ですが、最近では男女比が6:4という結果が報告されています。特に昨今は女性の社会進出が進み男女差はほとんど問題にならなくなりました。女性の場合は水虫と聞くと「汚い」「不潔」「臭い」というイメージが付きまとい、恥ずかしい病気との思いから薬局で水虫薬を購入できなかつたり、また皮膚科を受診できないでいる「隠れ水虫患者」が想像以上に多

いと思われます。さらに都会では若い女性の水虫患者が急増しており、これには女性特有の水虫になりやすい環境があげられます。社会人女性の多くがナイロン製のストッキングを着用し、足の指が密着しやすいハイヒールや通気性の悪いブーツを履くようになったことが水虫の増加に拍車をかける原因の1つと思われます。以前、「水虫の特効薬作ったらノーベル賞ものだ」などと言われた時代もありました。ノーベル賞は無理としても、それだけ水虫は治りにくい病気と考えられていました。しかし、近年水虫薬の進歩は著しく、外用薬も内服薬とともに静菌から殺菌へと変わってきています。いまや水虫はきちんと治療すれば完治できる病気です。ただし症状が無くなったら治療を止めては元も子もありません。根気よく治療を続けることが大切です。気になる症状があったら、恥ずかしがらずに皮膚科へ行って、まず水虫かどうかをきちんと診断してもらい適切な治療を行うことが肝心です。

余談ですが、中国では水虫のことを「香港脚」というそうです。香港では人口の7割近くが水虫にかかっており罹患率では世界一です。そんなところからこの呼び名が付いたと思われます。